

# 河童と砂金

SHATTER CONE



家を借りたら、オマケに河童が付いていた。

そんなモノは要らないと不動産屋に訴えたのだが、彼は愛想笑いでごまかしながら、

「要らないと言われましても、付いてしまってますからねえ」

と、全く取りあってはくれなかった。

大塚駅から徒歩7分。築35年の木造2DK一戸建てが、共益費込みで4万5千円。板塀で囲まれた敷地内には、二坪ほどの小さな庭まで付いている。日当たりも良いし結構静かだし、築は古いがなかなか住みやすそうである。

なのにこんな破格な家賃とは、幽霊が出るとか犯罪や自殺があったとかの、いわゆるワケあり物件というヤツだろう。そう悟ってはいたのだが、よもや河童というオプション付きだとは。

だが不動産屋によると、向こうも人間をあまり快く思っていないので、こちらが家に居る時はそうそう出てくるものでも無いし、何かを盗むなどの悪さをするような厄介者でも無い。ただ、たまにお互いが油断をしていたりするとバッタリ鉢合わせになる事がある程度で、その時は驚いて大声を上げたりせず、何も見なかったフリをすれば、何の問題も無いらしい。

実際物件を見に行った時はとても明るく住みやすそうな所で、部屋の隅々まで調べてみたがどこにも河童の姿は無く、棲んでいる気配すらも感じられなかった。

しかし、本当に河童なんて今の時代に存在するのだろうか。いや、今の時代どころか、あれは架空の妖怪じゃあないだろうか。

不動産屋は、少し声を潜めて付け加えた。

「実は私、実際に目撃したんですよ。一度だけですがね。で家主に話したところ、借りたい人には一言河童が出るかもと付け加えてくれと言われましてね。さっきも言いましたが善良な河童だそうですし、気にしなければ気になりませんよ。ただホント、たまに見かけたりすることがあるというだけで、その時に驚かないように、河童が居ますよと、始めにご説明しているだけなんです。それ以外何の問題もありませんし、滅多にありませんよ、こんなお得な物件は」

不動産屋の言葉に乗せられたワケでは無いが、結局俺はその物件を借りることにした。

4月から社会人で、親から独立しようと思っていた俺は、初めは家賃7万円ぐらいのワンルームマンションなんぞを借りるつもりだったのだが、駅近物件ということで、ついでに出されたその河童付格安物件が妙に引かれたのである。

多少、未知の生物に対する恐怖のようなものを感じるが、それよりも好奇心が勝ったのかもしれない。

河童は本当にいるのだ。

不安半分、期待半分。といった心境で、俺はその家へと引っ越した。

あれから約四ヶ月。

俺の期待もよそに、河童は一度も目撃できていない。

ただたまに、朝起きると、キッチンと締めたはずの水道の蛇口が少し開いており、ポタポタと水が漏れていることがある。蛇口が古いからだとか、俺の締め方が悪いだとかなのかもしれないが、俺的には皿が乾いてしまった河童が、水を求めてキッチンの水道を出したのは良いが、水かきのついた河童の手では、上手に蛇口が締められなかったと想像して楽しんでいたりする。

だがそのうち俺は、河童が居るかもしれないということを全く意識しないようになっていた。不動産屋の言う通り、気にしなければどうということも無いようだ。

そんなある日。

ついにその時が来た。

うだる程の暑さが続く、真夏の昼下がり。

会社は三日前から一週間の盆休みに突入しており、俺はエアコンの無いこの家から出ることも無く、だらだらと二階の六畳の部屋で、扇風機に当たりながら漫画雑誌を読んでいた。

すると突然。

隣の部屋から、ガラガラドスン！という大きな物音がした。

俺は驚いて雑誌を投げ捨て、隣の四畳半の部屋へとかけこんだ。

居た！

河童だ！

河童が押入れのフスマと共に、大の字になって倒れている！

押入れの荷物が少し散乱しているので、ここに棲んでいたのだろうか。十歳児ぐらいの身長に寸胴の体型。少々不気味な顔にくちばしのような口。緑色の肌で、背中には甲羅と、頭にはもちろ皿がある。

何もかもが、想像していた通りの河童そのまんまだ。

しかしどうしてこんな真っ昼間に、出てきたりしたのだろう。

ん？それにしてもコイツ、さっきから全く動かないが、まさか死んでいるんじゃないだろうな。

俺は恐る恐る近づいてみた。

眼は閉じていて、口は半開き。微かに腹が動いているので、息はあるようだ。

「おい。どうしたんだ？」

思わず俺は、声をかけた。

河童は俺の声に反応し、うっすら瞳を開けたが、すぐにまた、閉ざしてしまった。

何だかひどく弱っているようである。

この猛暑で、夏バテでもしたのか？

いや待て。確か河童は、皿が乾くと死ぬとか聞いたことがある。

よく見ると、皿はカサカサしているようだ。

俺は階段を降り、コップに水を入れて河童の元に戻り、キナリ色の乾いた皿を、ピチャピチャ

と濡らしてみた。水は見る間に染み込んでいき、持ってきたコップ一杯分を、全て吸収した。  
まだ足りないのか？と思っていると、河童の瞳がゆっくり開かれた。  
「大丈夫か？」

俺の声に、河童ははっとこちらに顔を向けた。そして勢い良く飛び起き、慌てて押入れの上の段に駆け登ろうとした。だがあまりに焦っているためか、ジタバタあがくだけで、巧く上れないようだ。

「落ち着けよ。何もしないさ...って言っても、通じないか」

思わず俺はそう声をかけた。

すると河童は動きを止め、ゆっくり俺を振りかえった。

「ホントに何もしません？」

喋った！しかもかなり流暢で、聞き取りやすい声である。

「言葉、解るのか？」

「だってニホンジンですもん。ホントに何もしません？」

「ああ。誰かに何かされたのか？」

「捕まえられて、ぐるぐる縛られたことがありました。これはものすごく怖かったです。それに、四角い箱を向けられた時も、とても怖かったです」

「四角い箱？」

「はい。それが雷様のようにピカッて光るんです。ものすごくまぶしくて、眼がつぶれるかと思いました。あれは二度と御免です」

なるほど。カメラのフラッシュだな。

まあ、普通河童を見つけたら、写真を撮りたくなるだろう。

河童は俺が安全人物であると感じたようで、胡座をかいて座る俺の前に、チョココンと正座をした。

「どうも初めまして。河童の久助です」

何と、礼儀正しい河童だ。俺もつられて、軽く頭を下げた。

「俺は滝口トモキ。よろしく」

「こちらこそよろしく願い致します。あ、お礼が遅れました。皿を湿らせて下さったんですね。ありがとうございます」

「何であんなになるまで放っておいたんだ？乾くと死んでしまうんだろ？」

「ええ。でもこの猛暑で...。いつもならこの季節は、庭にプールを作って、昼間はそこで過ごすんですが...。その...」

河童、いや久助は、少し言いにくそうにチラリと俺の顔色を伺った。

俺はすぐに、ピンと来た。

「なる程。俺が三日前から家にずっと居るから、出るに出られなかったんだな」

「え、ええ。その通りです。昨日の夜に一度皿を濡らしたんですが、何だか今日は物凄く暑くて...、でも出る事が出来なくて、それで脱水症状になっちゃったんです」

「悪かったな。今日から俺には遠慮せず水道を使えば良いし、プールでもなんでも作って入れば良い」

「ありがとうございます！良い人ですね、滝口さんって」

「トモキで良いよ。で、プールを作るって、穴でも掘るのか？」

「いいえ。大家さんにビニールの丸いプールをもらったんです」

「大家さん？」

「ええ。ここの家の持ち主の方です」

「六十歳ぐらいの、太目の派手なオバチャンか？」

「派手とかは分かりませんが、とても良い人です」

俺は、入居の際に挨拶をした大家を思い出した。

大家は、歳の割に少々派手な出で立ちで、化粧も濃く、外見はどこかキツそうな性格に見えたのだが、そう言えば彼女は俺にこう言った。

「もし河童ちゃんを見かけても、虐めたりしないで、そっとしておいてあげてね」と。

外見は少々陰険そうな雰囲気だったのだが、ビニールプールをあげたり、自分の物件に住まわせてやったり、見かけによらず親切な人なのだろう。人を外見で判断してはいけないという見本かもしれない。

「それで、どうしてここに住むようになったんだ？いつから住んでいるんだ？」

「ここは元々、私の家があった所なんです。昔はここに川が流れていて、私や他の仲間たちがそれぞれ川淵に家を作って住んでいたんです。でもちょっと旅に出ているうちに、川も家も、何もかも無くなっていて、代わりにこの家が建っていたんです」

「そりゃあ、お前が帰る場所を間違えたんじゃないのか？ちょっと旅に出ている間に、家はともかく、川まで無くなるなんてことは、有り得ないさ」

「いいえ。間違いありません。ココが私の家の場所です。目印とか地図とかは無くても、本能で解かります」

「しかしなあ…」

「鮭だって、生まれた川に帰るでしょ？あれと同じですよ」

「じゃあ、他の仲間はどうしたんだ？」

「分かりません。恐らく川のある場所へ移ったんでしょう」

「お前は行かないのか？」

「ええ。何となくココが気に入ってますんで」

「脱水症状で死にそうになってもか？」

久助は苦笑した。

「今日みたいなことは滅多にありません。だってココに人が住むことは、大家さん以来、あなたで二番目ですから」

「それは悪かったな」

「いえ…」

「で、大家さんはここに住んでいたのか？」

「ええ。私が四百年ぶりぐらいに旅から帰ってきたら、ココに大家さん一家が住んでいたんです」

「四百年だってえ？」

俺は思わず大きな声を上げた。

ちょっと旅に出ていたというのは、河童の感覚で、実際は四百年も経っていたのか。それで川が無くなり、家が建ってしまったのも納得がいく。

「一体、幾つなんだ？お前は」

「いくつでしたっけ。詳しくは忘れましたが、六百年ぐらいは過ぎたと思いますよ」

「ろっぴゃくねん…」

啞然とする俺に構わず、久助は続けた。



「それで私はこの家の人に直訴したんです。ココは私の家なんですって。そうしたら大家さんは、一枚の紙切れを私に見せて、これは自分がこの家の持ち主だと言う証明だ。お前はこの家が自分のものだということを証明できるかと言ったんです。もちろんそんなモノはありません。私がどうして良いのか判らず消沈していると、大家さんは、家賃...って言うんですか？毎月決まったお金を払うなら屋根裏に住まわせてあげようと言って下さったんです。そのうち大家さんは引越してしまっただんですが、家賃を払い続けるなら、いつまでも居て良いって言って下さいました」

それでコイツからの家賃に加えて他人にも貸し、ダブルで設けようという魂胆で、賃貸に出していたというワケか。

「家賃って...いくらなんだ？」

「月に三万円です。共益費とやらも込みだそうです」

あの婆さん、何と三万円も、狭くて暗い屋根裏部屋でふんだくっていたのか。つまり河童から三万円、俺から四万五千円で、合計七万五千円をこのボロ家で儲けているわけだな。

俺は大家の派手な容姿を思い出しながらそう思った。

「それでお前は、三万円をどうやって支払っているんだ？」

「砂金を採って来て、それをそのまま大家さんに渡しています」

「砂金？川で採ってくるのか？」

「ええ。我々の一族に伝わる秘密の川があって、そこでは涸れることなく砂金が採れるんです」

俺は思わず瞳を輝かせた。

涸れることが無い砂金の採れる川。

そんなスバラシイ川が存在するなんて。

そしてその川の場所を、コイツは知っている。

俺の頭の中には、自分に都合の良い展開が勝手に次々浮かんできた。

「その川はこの東京都内にあるのか？」

「それは秘密です。人間には話してはいけない掟ですから」

まあ、それはそうだろう。そんなものがあると人間が知れば大変なことになる。

しかしこっそり、俺だけが解かる方法はないものだろうか。

涸れることが無いのなら、少しぐらい良いんじゃないか？

今聞きだすのは無理でも、いつか何とか教えてもらおう。コイツに親切にしておけば、いずれ油断して、ポロリと口を割るかもしれないし。もしかしたら大家もそう考えて、コイツに親切にしているのではないだろうか。

俺は少し不気味なこの河童が、とても大事な存在に思えてきた。

それ以来、俺と河童の久助は、すっかり打ち解けて仲良くなった。

久助は俺が居ても構わず出てくるようになったし、たまに冷たい麦茶などを一緒に呑みながら、テレビを見たりするまでになった。

俺は久助の存在を、会社の同僚や親しい友人にも秘密にしておいた。

言えば恐らく見せてくれと押しかけてくるに決まっているだろう。そして俺が連れてきたヤツ等が、万一久助を怖がらせたり嫌がることをしたりしたら、俺が久助に嫌われてしまうかもしれない。

そんなことにでもなれば、せっかく良い関係になっているのが、水の泡だ。  
久助の為というより、自分の為に、俺は久助を保護した。

そんなある日。

会社から帰ると、キッチンのテーブルの上に一通の書置きが残されていた。

かなりの達筆で、『三日ほどで戻ります 久助』と書かれている。

そういえば月末で、家賃支払日が迫っている。

砂金採りに行ったのに間違いない。

何とか一緒に連れて行ってはもらえないかと思っていたのだが、今月は諦めよう。

そうして待つこと三日。

夜中の一時頃、久助は戻ってきた。

「起こしてしまいましたか。すみません」

「いや、起きていたし。採れたか？」

「ええ。御覧下さい。この通りです」

久助は腰にぶら下げていた巾着を、無造作に俺に手渡した。

ずっしりと重い。

この中に、ぎっしり砂金が詰まっているのだ。

俺は少々興奮を覚えながら、巾着の中身を、畳の上に少し出してみた。

「すげえ...」

不揃いの黄金の粒が、ざらざらと出てくる。

「こんなに...」

「一日がかりで、やっとこれだけ採れました」

ということは、往復二日。片道一日の距離に、その秘密の川があるのだ。俺はすぐにそう計算した。だが、ちょっと待て。確か家賃は三万円とか言っていなかったか？

「これを全部、大家に渡しているのか？」

「ええ。もしかして足りないですか？」

金の価値は良く解からないが、これだけの量で三万円ということはないだろう。十万、二十万ぐらいは、軽くあるんじゃないのか？あの大家のオバハン。どうりで羽振りが良さそうな格好をしているハズだ。何も知らない久助に、この袋一杯が三万円分だと教えたのではないだろうか。

「いや...。良く判らんが、十分だろう」

俺は久助が大家に騙されているかもしれないと思いつつ、確信はなかったのも、そう誤魔化した。

「そう言えば、どうしてオマエ、その川には住まないんだ？」

「その川って、砂金の採れる川のことですか？」

「ああ。その川は無理でも、他にも住めそうな川はたくさんあるだろ？川の無いこんな住宅地

にいつまでも住んでいて、辛いこととかはないのか？」

「そうですねえ…。川に行くとやっぱりホッとするし、ああ水辺は良いなあって思うんですが、何故だかココも、とても気に入っているんです。生まれ育った土地の匂いがするからでしょうか。今では河童の仲間も少なくなって、川でも滅多に出会わなくなったんですが、ココでは月に一度、大家さんに家賃の砂金を持って行った時に、とても美味しいお茶とキュウリをご馳走したださるんです。それがとても嬉しくて。それに今では、トモキさんが優しくして下さるでしょ。川に一人で暮らすより楽しいです」

「ふうん…」

他の仲間はどうなったのかは分からないが、久助は現代に一人取り残されて、とても寂しいのだ。

下心大有りで優しくしている俺を、久助は純粋に嬉しく思っている。

そう思うと、俺は少し胸が痛んだ。

「じゃあ、そろそろ私は自分の部屋で寝ます。おやすみなさい」

「屋根裏は暑いだろう。四畳半の方、使って良いぞ」

「ありがとうございます。でも、私は屋根裏を大家さんに借りていますから」

久助は砂金の袋を大事そうに抱え、俺に一度ペコリと頭を下げ、屋根裏部屋へと上がって行った。

俺は何となく、複雑な気持ちでその後姿を見送った。

その夜俺は夢を見た。

俺は久助を縄で縛っていて、後ろから頭の皿を金槌で軽く叩いている。すると久助は、口から金の粒をざらざらと吐き出すのだ。

俺は、「もっと吐け。もっと出るだろう。ホラ、休むな。吐き出せ」と言いながら、皿をコンコン、叩き続けた。すると久助は眼から涙を流しながら、金の粒を吐き出した。

目覚めた俺はとても後味が悪かった。

純粋な久助を何とか騙して、砂金の採れる川の場所を突き止めようと思っている俺が、何だか大悪人のように思えてくる。

だが、ただの小市民の俺が、その川さえ判れば金の不自由は無い一発大逆転の人生になるのだ。川の砂金は涸れる事は無いし、人間に教えてはいけないという掟だが、要するに、直接久助から教えてもらわなければ良いのではないだろうか。つまり俺が勝手に突き止めたとしたら、それは掟に背くことにはならず、それならば久助にも迷惑は掛からないだろう。

俺は夢見のモヤモヤを吹き払い、そう納得することにした。

翌日も、うだるような猛暑になった。

早朝に家賃を納めて戻ってきた久助は、大家さんから俺と食べるようにと、キュウリの入った巻き寿司…いわゆるカップ巻きを持って帰ってきたので、俺たちは昼食にそれを食べた。

「初めはこのワサビが、毒か何かじゃないかって思ったんですが、慣れると美味ですねえ。今ではこれが入っていないとモノ足りませんよ」

もともと細い瞳を、さらに細くして笑う久助に、俺もつられて笑う。

夢見の悪さが、何となく甦ってくる。

（この偽善者が）

そう罵る良心の部分と、

（早く砂金の川を突き止めちまえよ）

と煽る欲望の塊の部分。

その二つが俺の中で葛藤して、とても苦しい。

「ちょっと出てくる」

俺は冷静になろうと思い、そう言って立ち上がった。

「どこへ行かれるんです？」

「コンビニで週刊誌でも立ち読みしてくる」

「あ、じゃあ、ついでにアイス買ってきて下さいませんか？しろくまくんのカップのヤツです」

「しろくまくんのカップ？何だそりゃあ」

「大家さんが時々下さるんですが、分からなければ、普通の白いヤツで良いです。お金は今度、砂金を採って来た時にお返ししますんで」

「...」

「どうしたんですか？あの...、もしご面倒なら別に...」

「ああ。いや、少し考え事をしてた。しろくまくんのカップのアイスだな。お金は良いさ、それぐらい」

俺は「いってらっしゃい」と手を振る久助に背を向け、部屋を出た。

いつまでこんな日が続くんだろう。

俺は涼しいコンビニの中を虚ろに歩きながら、そんなことを考えていた。

俺の中の『欲』と『良心』が戦っているのが、自分でも判る。

そしてその葛藤を感じて、俺はとてもイライラしている。

あのクーラーも無い蒸し風呂のような暑さの部屋のせいも、多分にあるかもしれない。暑さで冷静な判断が出来なくなった俺は、本能が剥き出しになり、夢の中のように、久助を縛り付けてでも砂金の川の場所を吐かせようとするかもしれない。

それは時間の問題かもしれない。

久助と一緒に暮らしていると、いつか俺は理性がぶっとんで、地道に場所を突き止めるよりも、手っ取り早く久助を脅して場所を吐かせるだろう。

どうせなら...、どうせそうになってしまうなら、早い方が良いんじゃないのか？

悶々と悩む日々から抜け出せるし、涸れることのない砂金が手に入る。一生金の不自由のない生活ができるということだ。

だけど...それで良いのだろうか。

そんなことをして、俺は後悔しないだろうか。

久助を踏みにじってまで、自分だけの幸福を得たいのか？

いや...待てよ。

相手は河童じゃないか。河童と言えば、妖怪の類だ。今でこそ大人しくなっているが、かつては人間を水に引き込んで水死させる、恐ろしいヤツだったかもしれないじゃないか。表面は穏や

かにしているが、いつ本性をむき出しにしてくるか分からない。そんなヤツに義理立てる必要はないじゃないか。

だが…。

河童も俺も、心を持った生物には違いはない…



「今では、トモキさんが優しくして下さるでしょ」

久助はそう笑っていたよな…。

悶々と悩む俺の眼に、ふと、そのアイスが飛び込んできた。

『しろくま』と、蓋のところに大きく書いてある。

俺は「これか」と心の中で思いながら、それを二つ購入した。

久助の待つ家までは徒歩十分ほどだが、アイスが溶けると嫌なので、足早に俺は急いだ。

「ん…？」

家の前に、一台の黒い車が止まっている。

大家の車は確か白いジャガーだったので、大家では無いだろう。

一体誰だ？

何となく不安を感じ、急いで玄関の扉を開くと、そこには見慣れない男物の革靴が二つと派手な女物の靴が一つ、キチンと揃えられていた。

「久助！」

嫌な予感に、俺は階段を駆け上った。

六畳の和室に、久助は居た。

だが縄で縛られ、二人の黒いスーツを着た男と、相変わらず派手な出で立ちの大家に見下ろされて震えている。

「滝口君。お帰りなさい。ちょっとお邪魔してるわよ」

大家はにっこり微笑みながらそう言った。

「何なんですか！あんた等、久助をどうしようって言うんですか！」

「この人たちは、怪しい人ではないわ。国税局の査察の方達よ」

「国税局？」

「我々は国税局査察部の者だ。留守中にすまないが、これも調査のためだ。証拠を差し押さえるに來ただけなので、すぐに引き上げるよ」

「証拠って…どういうことなんですか！何で久助を連れて行こうとするんですか！」

怒る俺の耳元で、大家が香水の匂いをプンプンさせながら言った。

「大丈夫よ。少し証言に協力してもらうだけ。すぐに解放してくれると思うわ」

「貴方の話が本当だとしても、脱税には間違い無いですからね」

横から久助の縄を握っている男が口を挟んだ。大家は真っ赤な唇をぷうっと突き出して、不機嫌な表情になった。

何となく俺は理解した。

最近急に金持ちになった大家に脱税をしているだろうと国税局が目をつけ、調査にやっってきたのだ。そして大家は、収入源が河童からの家賃であると白状してしまい、証言のために久助を連れに來たのだろう。

「さ、立て。気味悪いヤツだ！」

男は強引に縄を引っ張ったので、縛られている久助は前のめりに転倒した。

「止めろよ！乱暴するな！」

「取調べが終われば、すぐに帰してやる。協力する様に、君からも言ってくれ」

「だからちょっと待てよ！」

「トモキさん」

尚も激怒する俺を宥めたのは、久助だった。

「私、行ってきます。心配してくださって、ありがとうございます」

久助は何とか自分で立ち上がり、俺にペコリと頭を下げた。

「久助...」

「大丈夫ですよ。大家さんがついていて下さいますから。あ...、買ってきてくださったんですね。ありがとうございます。帰ってから食べますので、冷蔵庫に入れていてくださいますか？」

「あ...、ああ...」

久助は再び、ペコリと頭を下げた。

「私が居るから大丈夫よ。じゃあお騒がせしてゴメンなさいね」

大家はそう残すと、久助を引き立てていく二人の男の後に続いて、部屋を出て行った。

俺は溶けかけたアイスの入ったコンビニの袋を持ったまま、呆然とそこに取り残された。

連れて行かれた久助はどうなる？

あの様子だと、砂金の話は大家がすでに口を割っているだろう。

そして取調べで、砂金の川の場所を吐かされる。

その後はどうなる？

そこへ案内しろと強要されるに違いない。

その後は？

久助は大丈夫か？

本当に無事で解放されるのか？

どこかに永遠に監禁されたり、見世物にされたり、虐められたりはしないだろうか。

そう思うと、俺はいたたまれなくなり、コンビニの袋を投げ捨てて、階段を駆け下りた。

久助は車に、無理に押し込まれようとしている。だが激しく車を怖がっている様子で、「きゅうきゅう」と必死に泣き叫んでいる。

俺は久助を押し込もうとしている男達に体当たりをし、さらに開いていた運転席に飛び乗った。

「乗れ！久助！」

俺の声に我に返った久助は、すでに後部座席に乗っていた大家の隣に飛び乗った。

ドアはまだ半分開いたままだったが、俺は急発進し、ようやく立ち上がった男たちの視界から遠ざかることに成功した。

「まあまあ、滝口君ってば...」

「大家さん、ドア閉めて！」

「あら、そうね」

大家は久助を乗り越え、半分開いていたドアを何とか閉めた。

「久助の縄、解いてやって」

「あら、そうね」

大家は久助の縄を解きながら、呟くように言った。

「こんなことして、大丈夫かしら」

「大丈夫じゃあ無いでしょうね。検問とかで引っかかるのは時間の問題だと思いますよ」

俺は冷静にそう答えた。

「どうするつもりなの？」

「かなりヤバイっすね。俺免許不携帯だし。とにかく大家さんは降りて下さい」

「そう？何だか心臓がドキドキしてきたから、じゃあ、私は降りるわ。河童ちゃんはどうするの？」

「私はどうしたら良いんでしょう、トモキさん」

「何とかどこかの川まで連れて行ってやるから、そこから上流に行って、人気の無いところで暮らせ。あの家には戻るな」

「どうしてです？あそこは私の故郷なのに」

「あそこはもう危険だ。戻れば捕まって、どこかに監禁されてしまうかもしれない。それに…」  
俺は言葉を切った。

「それに…何ですか？」

「それに川で暮らすのが、河童の本当の姿だろ？」

それに俺だって、いつ砂金欲しさに、本能を剥き出しにして襲い掛かるか解からん…。

そう言いかけたのを、俺はキレイな言葉で誤魔化した。

大家を適当な所で降ろし、車を走らせること約二十分。

大きな川の土手に着いた俺たちは車を降り、川辺に向かって並んで歩いた。

「お別れなんですか？」

「そうだな」

「私、また一人になるんですね…」

その言葉に、俺の胸が痛くなった。

「またいつか会えるさ。まとまった休日が取れたら、遊びに来てやるから」

「本当ですか？楽しみにしてます！私、この川の上流に居ますから、きっと来て下さいね！」

「ああ。必ず行くさ」

俺の社交辞令的な言葉に、素直に喜ぶ久助。

俺はもう二度と久助に会わないだろうと、心の中では思っている。

それが、お互いのためなんだ。

俺は久助にとって、良いヤツのままで居た方が良いんだ。

純粋な久助を、哀しませないために。

そして俺が自分を見失わないためにも。

川に飛び込み、気持ち良さそうに泳いでいく久助をしばらく見送った後、俺は車で家へと戻った。

そこにはあの男たちと警察が数名来ていて、俺は久助の代わりに連行されるハメとなった。  
だが、男たちが説明する河童の話は警察の人間には全く伝わらず、俺もその点ではシラを切り通

したので、俺は家の前でキーが付いたまま放置してあった車を、つい出来心で運転してしまったことになり、元の場所に戻したので辛うじて窃盗罪にもならず、何とかその日のうちに開放してもらえた。

俺が家に落ち着いたのは、夜の十一時過ぎだった。

なんだかとても寂しい気がする。

まるで同棲していた彼女にでも、逃げられたような気分だ。

だがこれで良いんだ。

俺は、廊下にべったり溶けて流れているアイスを拭きながら、そう自分に言い聞かせた。

それから一年後。

俺は転勤で、埼玉に引っ越すことになった。

不動産屋を回り、格安一軒家を見つけるたびに、つい「河童は付いていますか？」などと聞いてしまい、営業マンに怪訝な顔をされてしまうのだが、とりあえず適当な格安ワンルームマンションを見つける事が出来て、何とか今では落ち着いている。

そんなある日。

俺は意外な所で、久助を目撃した。

それはテレビのニュースの中、多摩川で気持ち良さそうに泳ぐ久助がスクープされており、「タマちゃん」などと呼ばれていたのだ。

地元の人とは勿論、遠くからも久助を見るために大勢の人が多摩川に押しかけ、連日大騒ぎとなっているのだが、当の久助はお構いなしで悠然と泳いでいる。

俺と会った当初では、とても臆病で人間嫌いだったようだが、カメラのフラッシュも全く平気になっている様子だ。

それともあれは別の河童なのだろうか？

テレビ画面を見る限りでは、確かめようも無い。

騒動が落ち着き、世間が無関心になったら、しろくまくんアイスでも手土産にして、多摩川に行ってみようか。

久助との日々を懐かしく思い出しながら、俺はそう思った。

## 河童と砂金

<http://p.booklog.jp/book/55075>

著者 : shattercone

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/shattercone/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55075>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55075>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ